

霧島山の火山活動解説資料（令和7年6月）

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

えびの高原（硫黄山）周辺

硫黄山では、活発な噴気活動が続いている。硫黄山付近の深いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しています。

硫黄山では、現時点では噴火の兆候は認められませんが、活火山であることから、現在活発な噴気活動がみられている硫黄山火口内、及び硫黄山の西側500mの噴気地帯から概ね100mの範囲では、熱水・熱泥等が飛散する可能性がありますので注意してください。また、火山ガスにも注意が必要です。

地元自治体等が行う立ち入り規制に従うとともに、火口周辺や噴気孔の近くにはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1～3、図4-①②）

監視カメラによる観測では、硫黄山の南側の噴気地帯で噴気が最高で300mまで上がるなど、活発な噴気活動が続いている。同噴気地帯では、噴気孔からの熱水の流出を時々確認しました。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気は観測されませんでした。

13日に実施した現地調査では、硫黄山の南側の噴気地帯において、活発な噴気活動が引き続き認められました。また、火口南東側から南側斜面の一部では、前回観測（2024年7月4日）と比較して、地熱域がわずかに拡大していることを確認しました。

28日に韓国岳4合目から実施した現地調査では、硫黄山の火口南東側から南側斜面、南西側及び西南西側で引き続き地熱域を確認しましたが、前回観測（2025年5月7日）と比較して特段の変化は認められませんでした。また、硫黄山の西側500m付近（2018年4月26日の噴火場所）では噴気及び地熱域は確認されませんでした。

・地震や微動の発生状況（図4-③④⑤、図5）

硫黄山付近の深いところを震源とする火山性地震の月回数は17回と少ない状態で経過しています（5月：15回）。火山性微動は2023年7月8日以降観測されていません。

えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は76回で、前月（5月：48回）と比較して増加しました。

震源の求まった火山性地震は、主に韓国岳付近の深さ1～5km付近、大浪池付近の深さ0～3km付近に分布しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年7月分）は令和7年8月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図4-⑥、図6、図7）

GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが、同年11月頃から停滞しています。

・全磁力変化の状況（図8）

全磁力観測では、観測を開始した2016年2月以降、硫黄山北側の観測点で全磁力の増加、南側の観測点で全磁力の減少といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。



図1-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山付近の状況
(6月7日、えびの高原監視カメラ)

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気が最高で300mまで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。

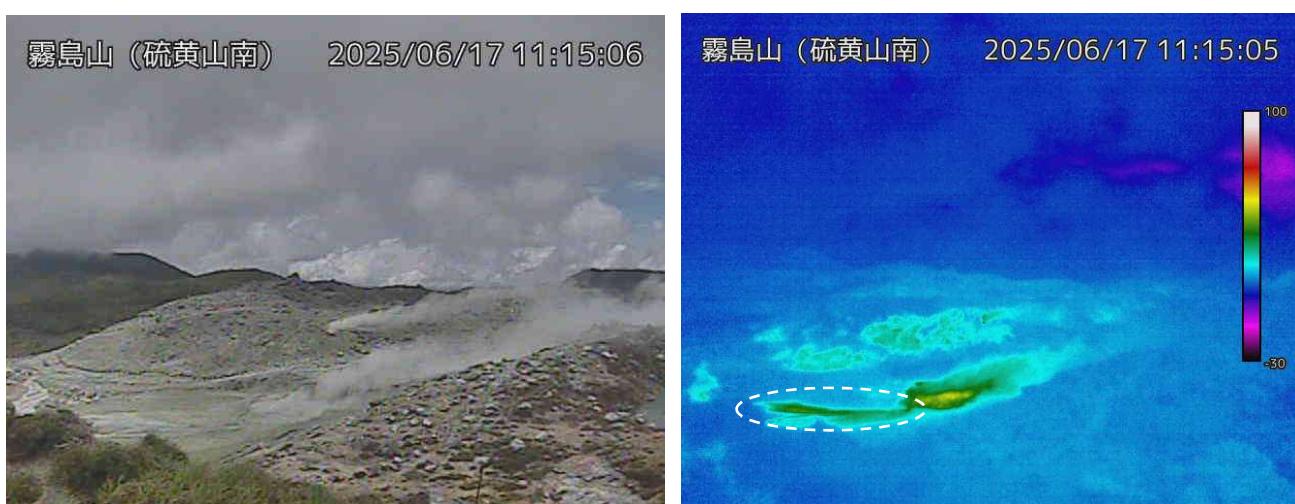


図1-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山南側の状況（6月17日、硫黄山南監視カメラ）
硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気孔からの熱水の流出を時々確認しました（白破線）。

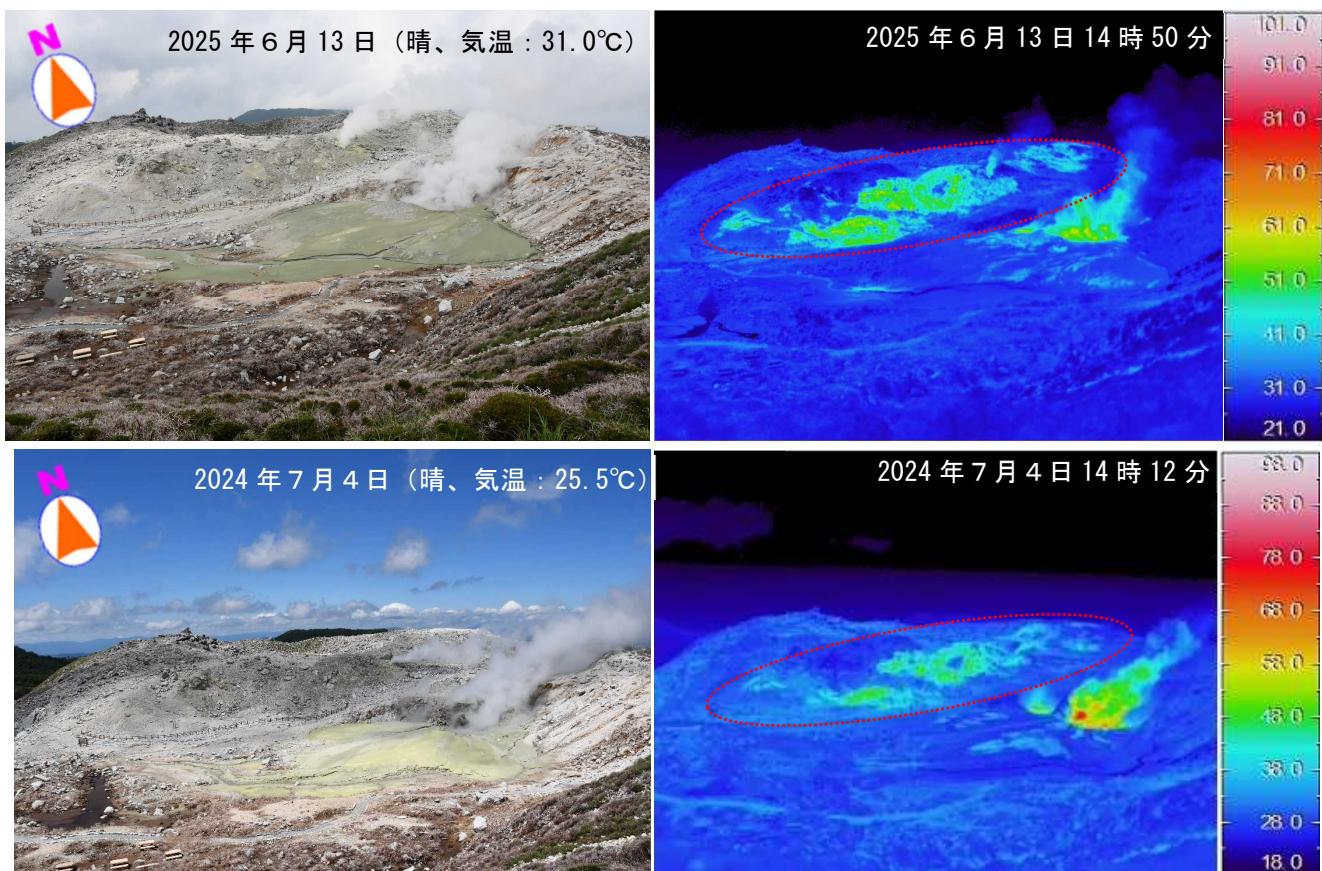


図3-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山南側の噴気及び地熱域の状況
(硫黄山南2全磁力観測点付近から観測)

- ・硫黄山の南側の噴気地帯では、大きな噴気音を伴う活発な噴気活動が引き続き認められました。
- ・硫黄山の火口南東側から南側斜面の一部では、前回観測（2024年7月4日）と比較して、地熱域がわずかに拡大していることを確認しました（赤破線内）。

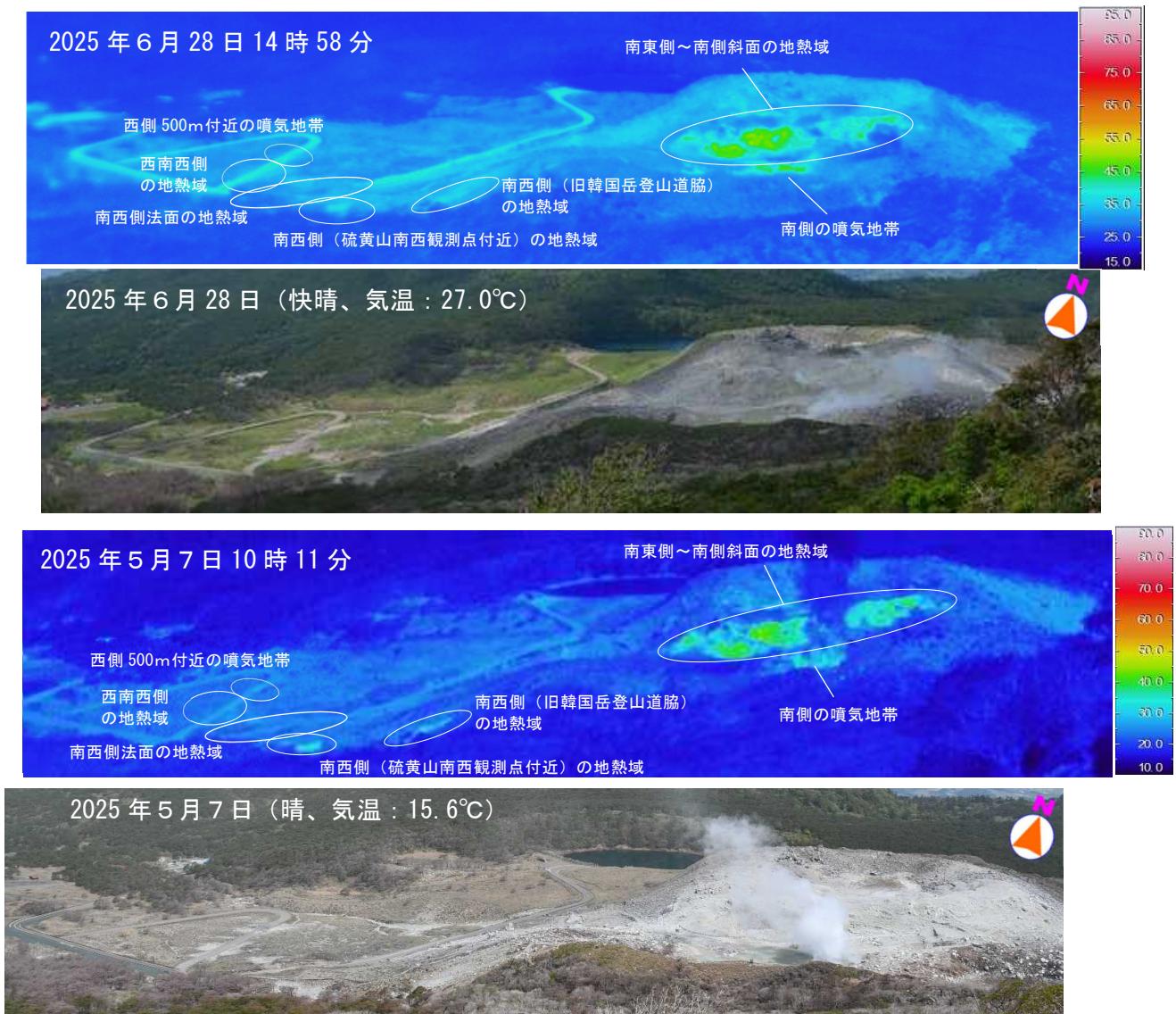


図3-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山の火口及びその周辺の状況
(韓国岳4合目から観測)

- ・硫黄山の火口南東側から南側斜面、南西側（旧韓国岳登山道脇、硫黄山南西観測点付近）及び西南西側では、前回観測（2025年5月7日）と比較して噴気の状況や地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。
- ・硫黄山の西側500m付近（2018年4月26日の噴火場所）では噴気及び地熱域は確認されませんでした。

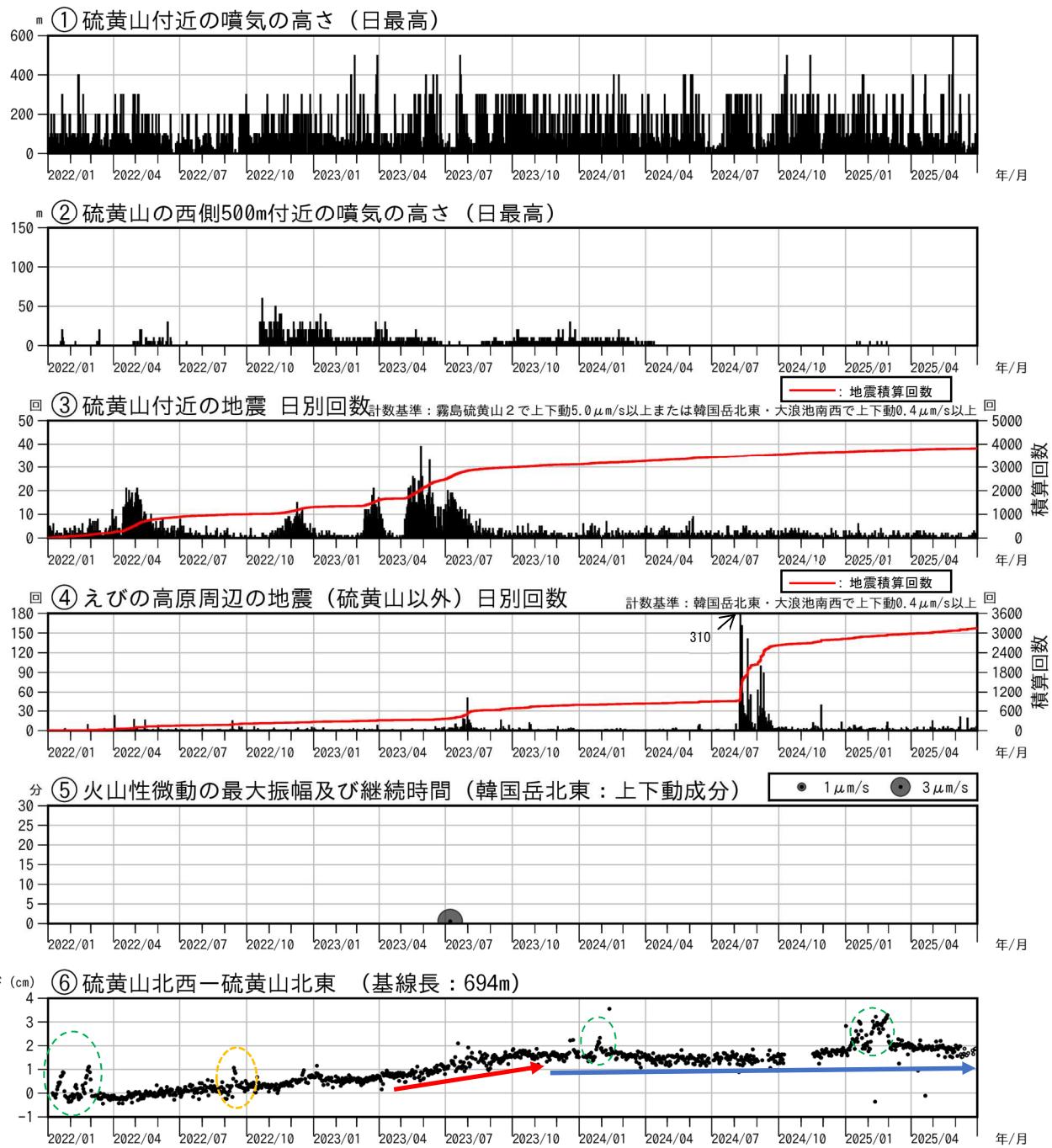


図4 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）火山活動経過図（2022年1月～2025年6月）

<6月の状況>

- 監視カメラによる観測では、硫黄山の南側の噴気地帯で噴気が最高で300mまで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気は観測されませんでした。
- 硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震の月回数は17回と、少ない状態で経過しています（5月：15回）。
- えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は76回で、前月（5月：48回）と比較して増加しました。
- 火山性微動は2023年7月8日以降観測されていません。
- GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年11月頃から停滞しています（青矢印）。

⑥の基線は図7の①に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

⑥の緑色破線内の変化は地面の凍上の影響、橙色破線内の変化は台風等の気象要因によるものと考えられます。

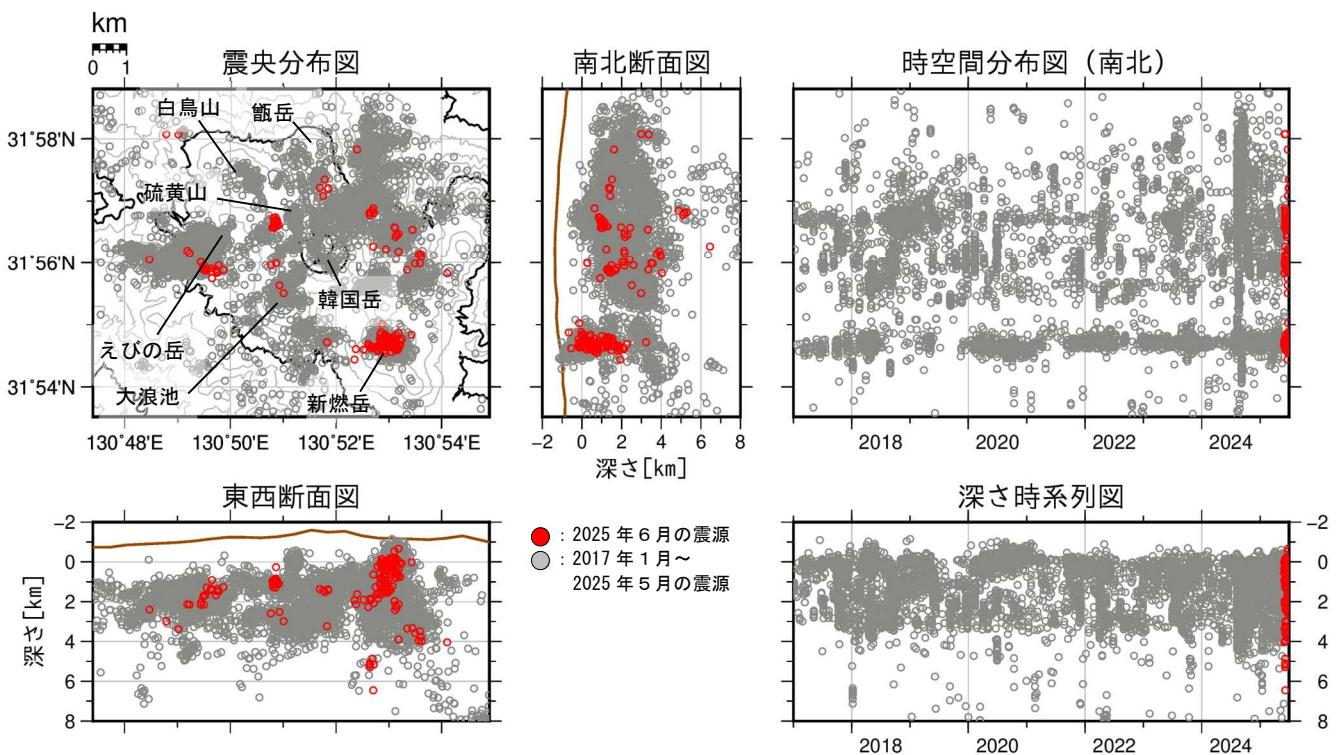


図5 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）震源分布図（2017年1月～2025年6月）

<6月の状況>

震源の求まった火山性地震は、主に韓国岳付近の深さ1～5km付近、大浪池付近の深さ0～3km付近に分布しました。

※2018年10月は、観測点の障害により、硫黄山近傍で震源が求まらなかった期間があります。

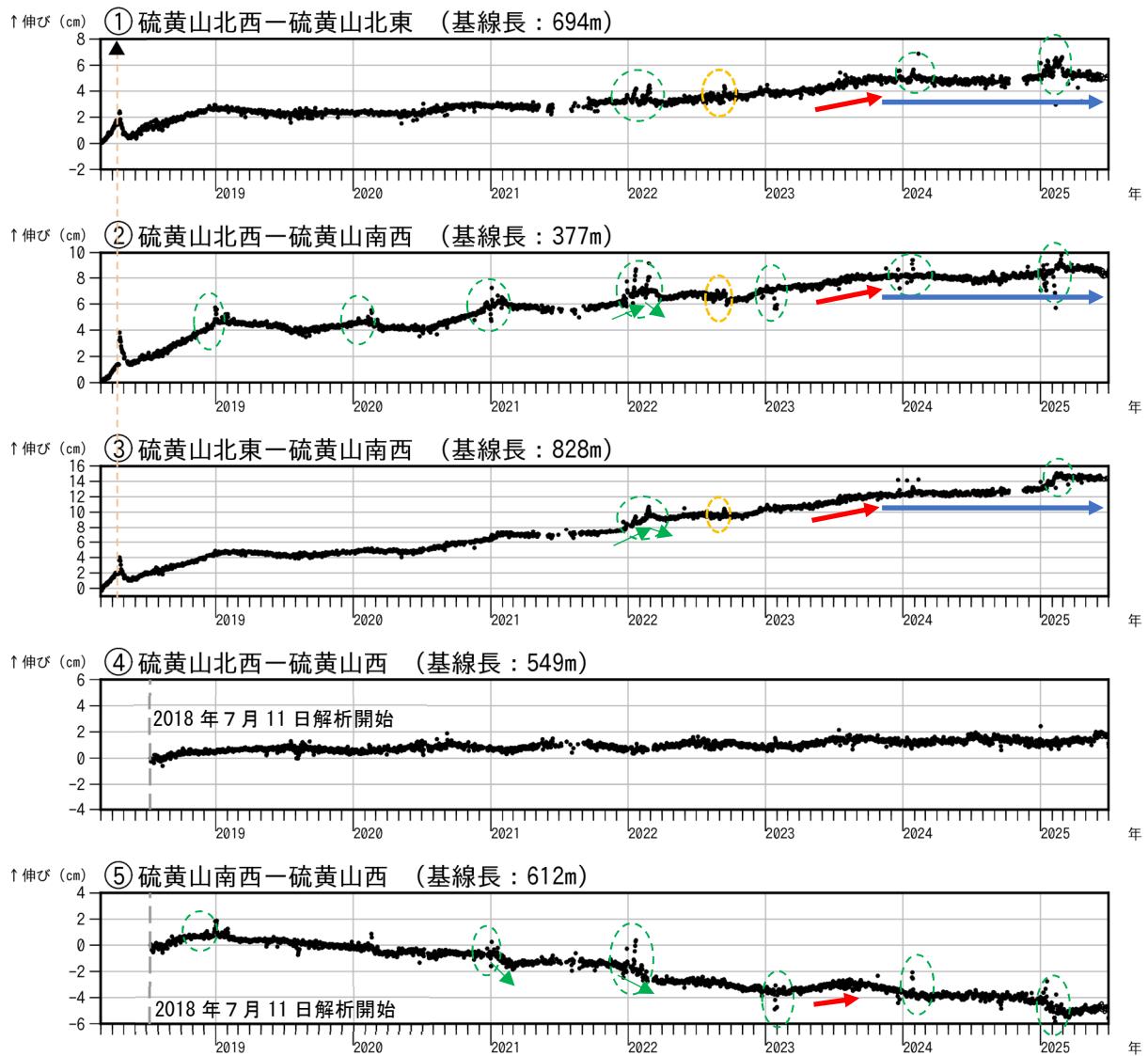


図6 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）GNSS連続観測による基線長変化（2018年3月～2025年6月）

GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年11月頃から停滞しています（青矢印）。

これらの基線は図7の①～⑤に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色の破線内の変化は地面の凍上の影響、橙色の破線内の変化は台風等の気象要因の影響と考えられます。

②③⑤の基線において2021年1月及び同年12月頃から2022年3月頃にかけて認められる変化（緑矢印）は、硫黄山南西観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018年4月19日及び26日の噴火の発生を示しています。

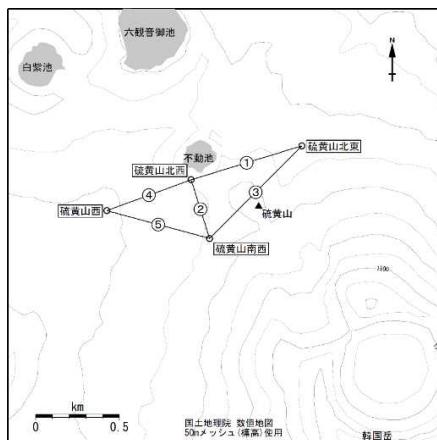


図7 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 図4及び図6のGNSS連続観測点と基線番号

白丸（○）は気象庁の観測点位置を示しています。

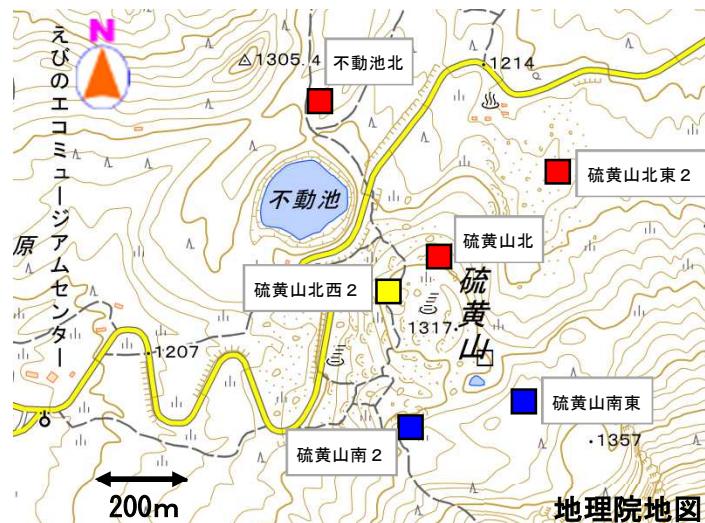
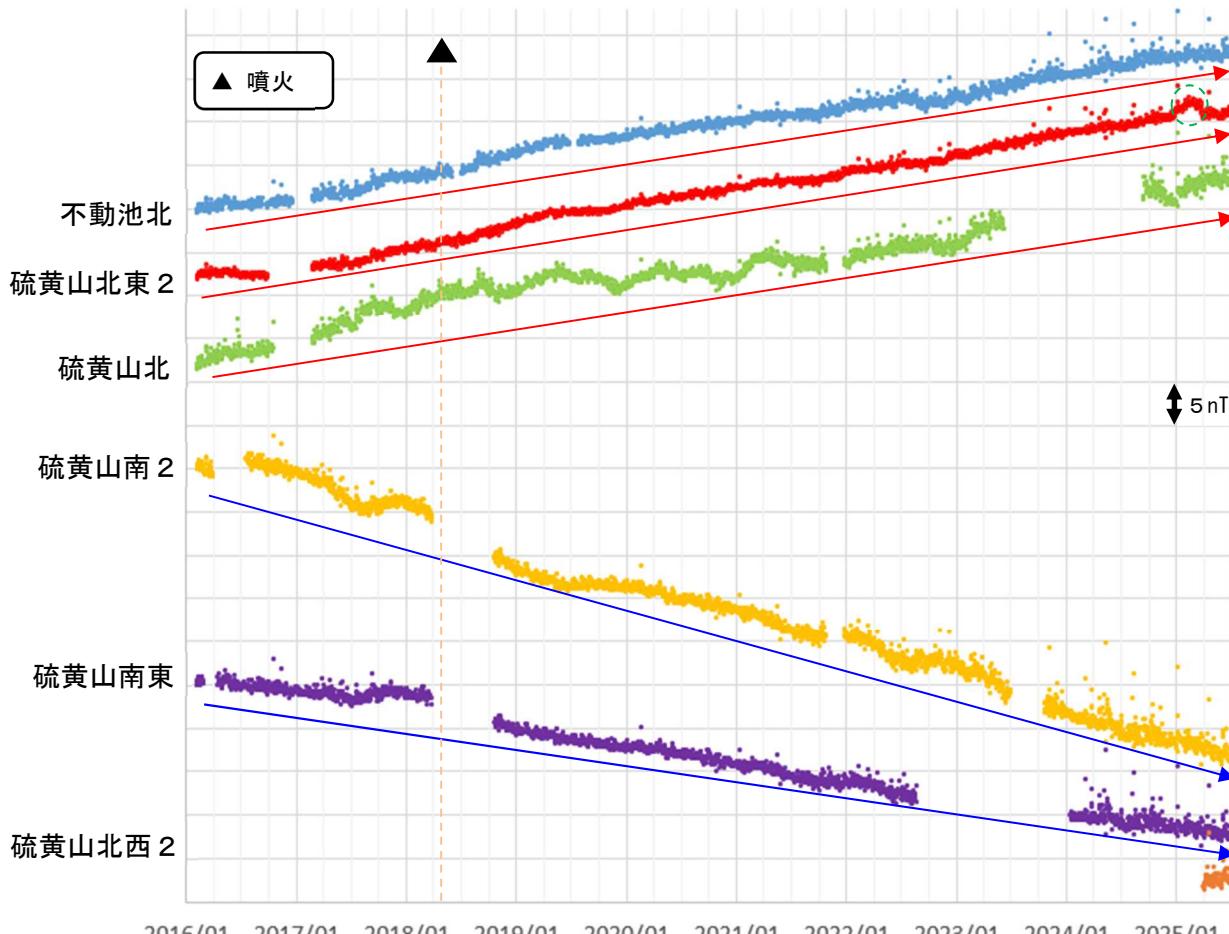


図8-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）全磁力観測点配置図

2016年2月の観測開始以降の各観測点の全磁力の変化傾向（図8-2の変化傾向）を「■（増加傾向）」「■（減少傾向）」「■（傾向なし、またはデータ不足等により傾向不明）」でそれぞれ示しています。

図8-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）全磁力観測点で観測された全磁力変動
(2016年1月～2025年6月)

観測開始（2016年2月）以降、硫黄山の北側の観測点で全磁力の増加（赤矢印）、南側の観測点では全磁力の減少（青矢印）といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。

各観測点と地磁気観測所鹿屋観測施設（硫黄山の南約60km）の全磁力差分値のうち、電離層の影響が小さくなる夜間の平均値（00:00～02:59 (JST)）を求め、日値としてプロットしています。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018年4月19日及び26日の噴火の発生を示しています。

空白部分は欠測を示しています。

硫黄山北東2観測点で2025年1月頃から3月頃にみられる変動（緑色の破線内）は、観測点近傍での掘削工事によるものと考えられます。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帶磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなることがわかります（図8-3）。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じことがあります。

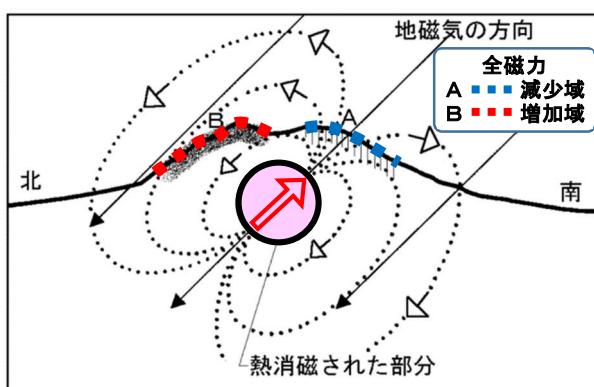


図8-3 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内部の温度変化
北側で增加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で增加	帶磁	低下

大幡池

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

- ・地震や微動の発生状況（図2-②、図3）

火山性地震の月回数は17回でした（5月：7回）。

震源の求まった火山性地震は、大幡池の西側1km付近の深さ3～4km付近及び大幡池付近の深さ4km付近に分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

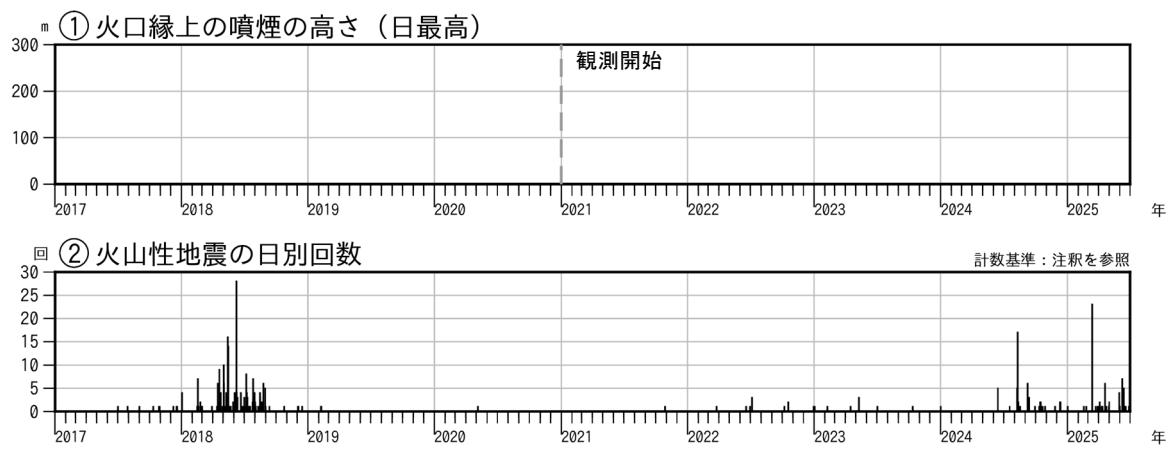
- ・地殻変動の状況（図4、図5）

GNSS連続観測では、一部の基線で2025年1月頃から新燃岳付近の地下の膨張によると考えられるわずかな変化がみられています。



図1 霧島山（大幡池） 大幡池及び大幡山の状況（6月19日、八久保監視カメラ）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。



<6月の状況>

- ・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
- ・火山性地震の月回数は17回でした（5月：7回）。

大幡池付近の火山性地震の回数について、2020年12月31日までは「新燃岳南西観測点（計数基準 水平動： $2.0 \mu\text{m/s}$ ）」で計数していましたが、大幡池付近の地震活動をより正確に捉えるため、2021年1月から「大幡山登山口観測点（計数基準：南北成分： $6.0 \mu\text{m/s}$ ）」で計数しています。

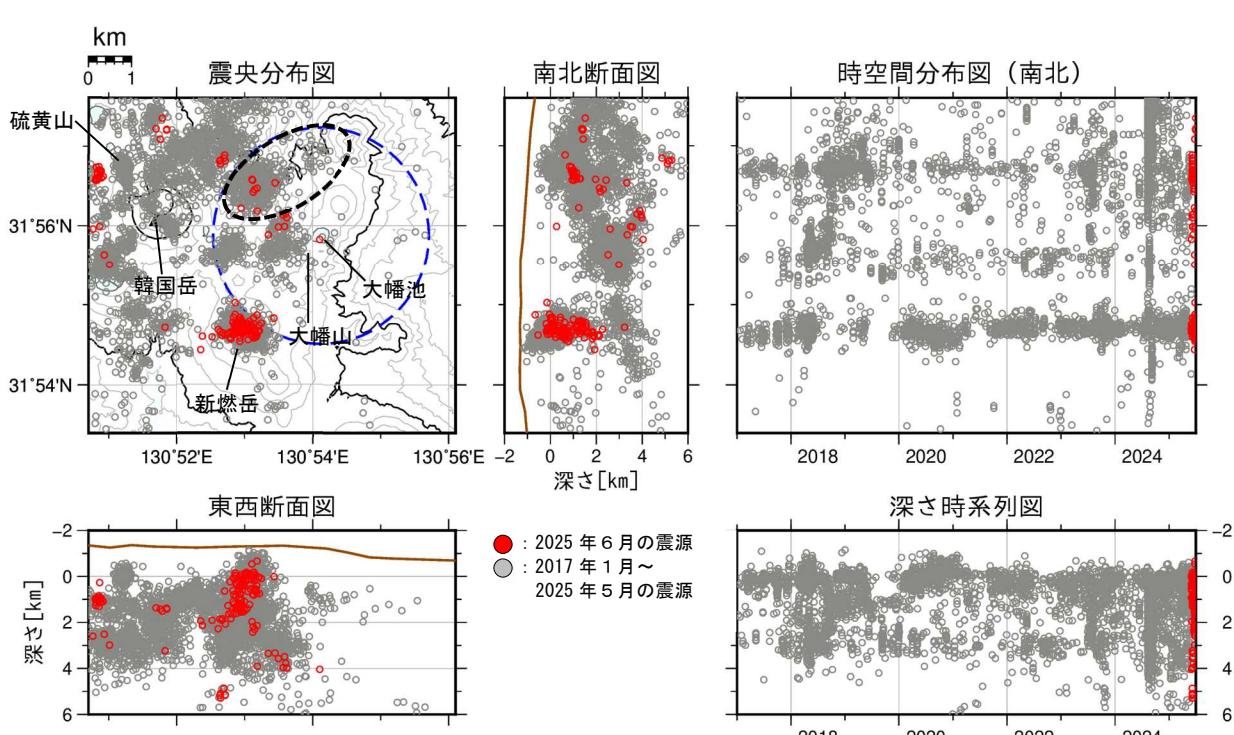


図3 霧島山（大幡池） 震源分布図（2017年1月～2025年6月）

<6月の状況>

震源の求まった火山性地震は、大幡池の西側1km付近の深さ3～4km付近及び大幡池付近の深さ4km付近に分布しました。

霧島山（大幡池）の火山活動については、主に大幡池及び大幡山付近（青破線内）の地震活動に注目して監視しています。大幡池及び大幡山付近では、新燃岳の火山活動が活発であった2018年3月から7月にかけて火山性地震の増加がみられたことがあります。

大幡池の北西側の地震（黒破線内）は、えびの高原周辺の地震として計数しています。

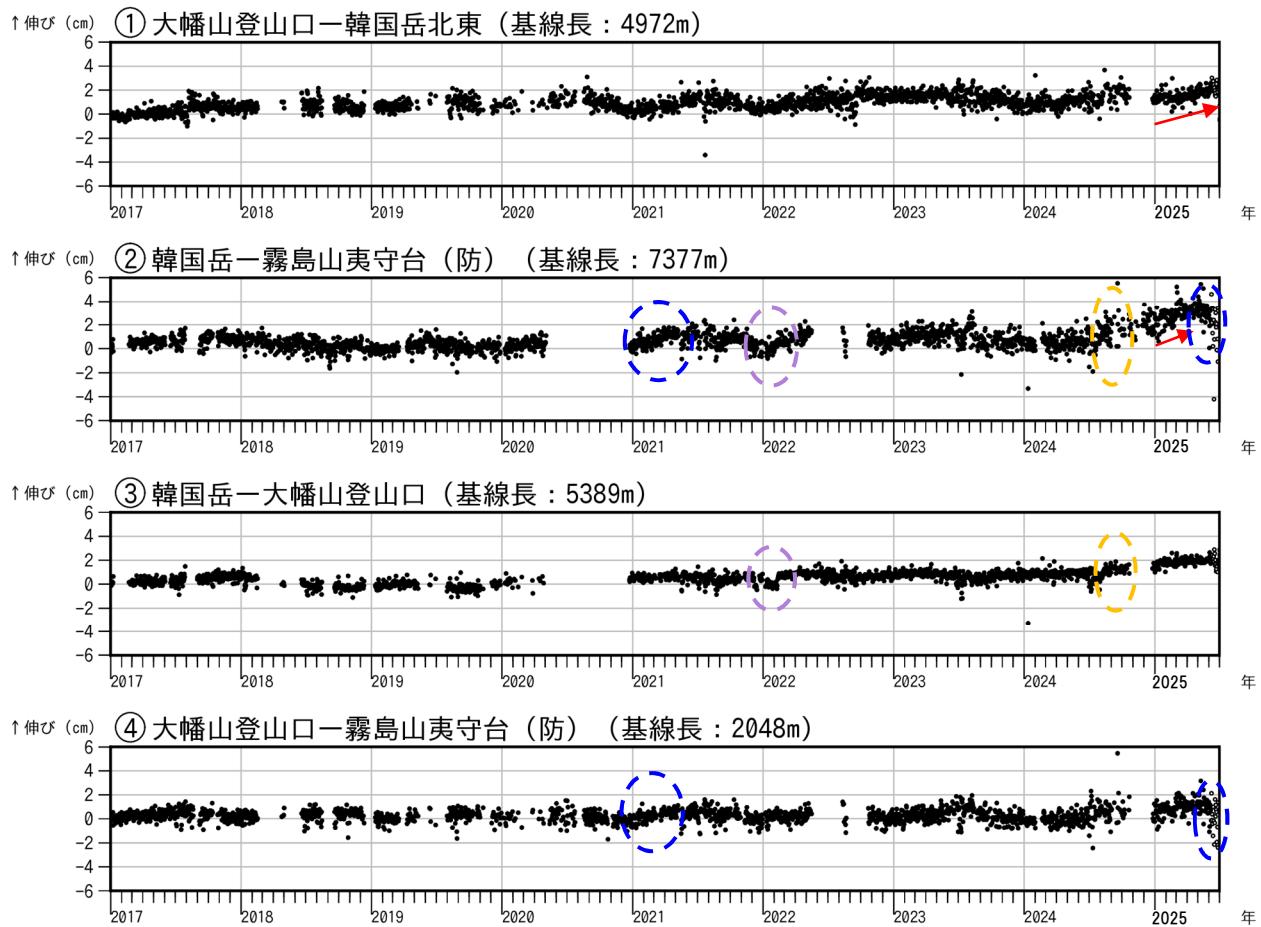


図4 霧島山（大幡池）GNSS連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年6月）

GNSS連続観測では、一部の基線で2025年1月頃から新燃岳付近の地下の膨張によると考えられるわずかな変化がみられています（赤矢印）。

これらの基線は図5の①～④に対応しています。

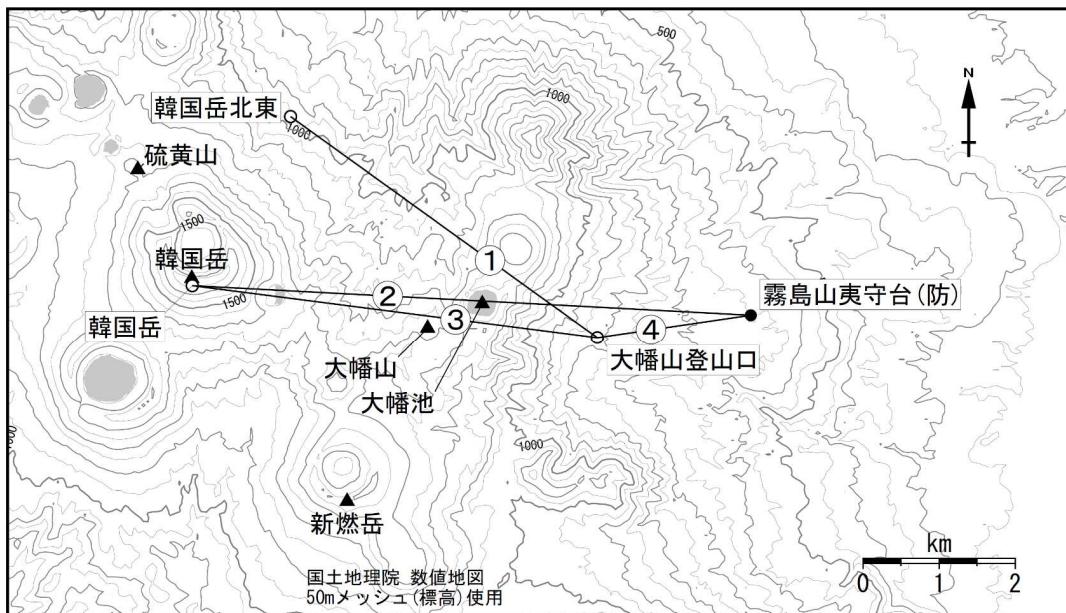
直近のデータは白丸で示しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線内の変化は、霧島山夷守台(防)観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

紫色の破線内の変化は、韓国岳観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

オレンジ色の破線内の変化は、2024年8月8日の日向灘の地震による変動です。

(防)：防災科学技術研究所



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(防)：防災科学技術研究所

図5 霧島山（大幡池）GNSS連続観測点と基線番号

新燃岳

新燃岳では、6月22日に新燃岳火口で噴火が発生し、その後も、噴火活動が継続しています。新燃岳で噴火を観測したのは、2018年6月27日以来です。

23日に山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は4,000トン（前回5月15日には検出されず）を観測し、急増していることを確認しました。このことから、新燃岳の火山活動はさらに高まったと判断し、23日18時30分に噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増減を繰り返していましたが、22日に急増し、非常に多い状態で経過しています。

GNSS連続観測では、2024年11月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。また、3月頃から、霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね3kmまで、火碎流が概ね2kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね3kmの範囲では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

2011年と同様に爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～8、図10-①②）

新燃岳では、22日に噴火が発生し、15時25分頃※から17時55分にかけて監視カメラで噴煙を観測しました。噴煙は最高で火口縁上500m以上に上がり、東へ流れました。新燃岳で噴火を観測したのは、2018年6月27日以来です。なお、この噴火に伴う噴石の飛散は確認されていません。この噴火に伴い、同日実施した現地調査及び聞き取りによる降灰調査では、宮崎県小林市、高原町及び宮崎市等の広い範囲で降灰を確認しました。高原町では道路の白線が見えなくなるほどの多量の降灰を確認しました。

24日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が高原町から実施した現地調査では、新燃岳火口周辺は雲に覆われており噴煙や火口周辺の状況は不明でした。

26日07時58分頃、高原町役場より、宮崎県高原町で降灰があったと通報がありました。12時50分及び15時07分に、現地調査中の職員が、乳白色の噴煙が火口縁上1,000mまで上がり、東及び南東方向へ流れたことを観測しました。同日実施した現地調査及び聞き取りによる降灰調査では、宮崎県高原町で少量の降灰を確認しました。

27日10時25分に監視カメラで観測した噴火は、7月3日（期間外）以降も継続しています。

28日に韓国岳から実施した現地調査では、火口内の北東側から乳白色の噴煙が火口縁上800mまで上がり南東に流れていることを確認しました。火口内では噴煙による熱域を確認しました。また、火口外の北側斜面に火山灰が堆積したような領域が認められ、周辺より高い温度であるこ

※22日時点では、噴火開始時刻を16時37分頃と報じていましたが、気象庁が小林市に設置した八久保観測点の監視カメラの映像を精査した結果、15時25分頃から噴火が始まっていることを確認しました。

とを確認しました。西側斜面の割れ目付近では、前回（5月7日）の観測と比較して地熱域が火口方向に拡大したことを観測しました。

30日に鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、新燃岳火口内の北東側において、列状に並んだ複数の火孔を確認しました。

7月2日以降、噴火に伴う噴煙量の一時的な増大が時々観測され、7月3日には有色の噴煙が最高で火口縁上5,000mまで上がりました。新燃岳で噴煙が5,000m以上上がったのは、2018年4月5日以来です。

新燃岳西側斜面の割れ目付近では白色の噴気の高さは期間を通して100m以下で経過しました。

・地震や微動の発生状況（図9、図10-④⑤⑥、図11）

新燃岳では、2024年10月下旬頃から火口直下を震源とする火山性地震が増減を繰り返していましたが、22日に急増し、非常に多い状態で経過しています。火山性地震の6月の合計回数は3,076回で、前月（5月：1,021回）と比較して増加しました。22日以降、火山性微動が断続的に発生しています。

震源が求まった火山性地震は、主に新燃岳火口直下の深さ0～2km付近及び新燃岳の西側約1kmの深さ2km付近、新燃岳の北東側約3kmの深さ3km付近に分布しました。

・火山ガスの状況（図10-③）

23日に山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は4,000トン（前回5月15日：検出されず）を観測し、急増していることを確認しました。火山ガスの放出量が1日あたり1,000トンを超えたのは、2018年の噴火時以来です。

その後の現地調査でも、1日あたりの放出量は2,100～4,000トンと多い状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図10-⑦、図12、図13、図14）

GNSS連続観測では、2024年11月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。また、3月頃から、霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。

新燃岳周辺の傾斜計では、22日12時頃から15時頃にかけて、火山性微動の発生に伴い、山体の膨張及び収縮を示す地殻変動が時々認められました。



図1 霧島山（新燃岳） 新燃岳火口の噴煙の状況（八久保監視カメラ・高原西麓監視カメラ）
(左図：噴火開始時の6月22日15時25分 右図：最高噴煙高度を観測した7月3日の噴火)

- ・噴火開始時には噴煙（黄色破線内）は火口縁上500m以上に上がり、東へ流れました。
- ・7月3日には有色の噴煙が最高で5,000mまで上がりました。



図2 新燃岳西側斜面の割れ目付近の噴気の状況
(6月1日07時06分、新湯林道監視カメラ)
新燃岳西側斜面の割れ目付近での噴気の高さは100m以下で経過しました（黄矢印）。



図3 霧島山（新燃岳） 宮崎県高原町広原の降灰状況（6月22日18時頃）

現地調査では、宮崎県高原町広原において、道路の白線が見えなくなるほど多量の降灰を確認しました。降灰量は1平方メートルあたり95gでした（22日18時49分時点）。小さな噴石は確認されませんでした。

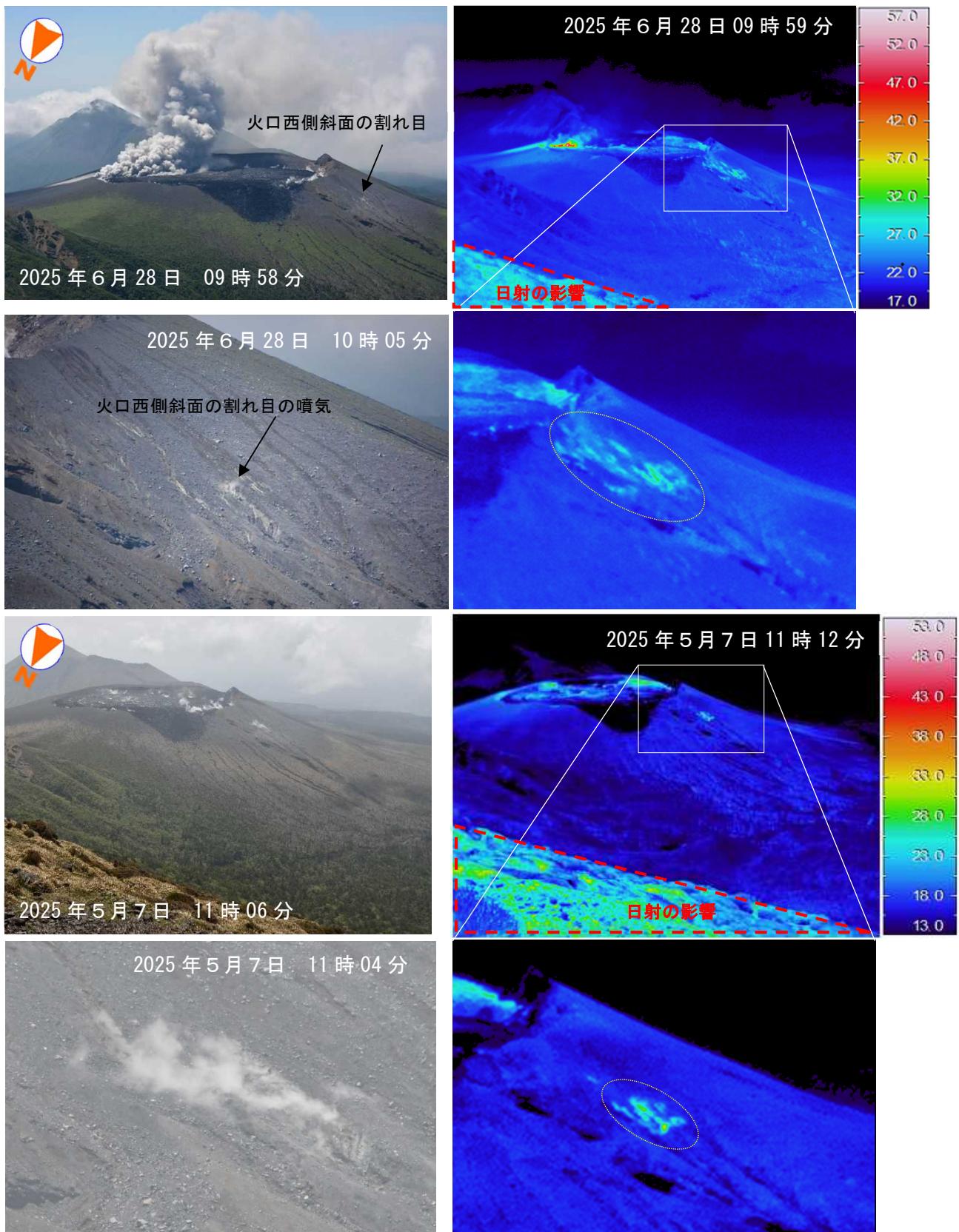


図4 霧島山（新燃岳） 新燃岳火口周辺の状況（韓国岳山頂付近からの観測）

- ・韓国岳から実施した現地調査では、火口内の北東側から乳白色の噴煙が火口縁上800mまで上がり南東に流れていることを確認しました。
- ・火口内では噴煙による熱域を確認しました。
- ・新燃岳西側斜面の割れ目付近では、前回（5月7日）の観測と比較して地熱域（黄丸）が火口方向に拡大したことを観測しました。

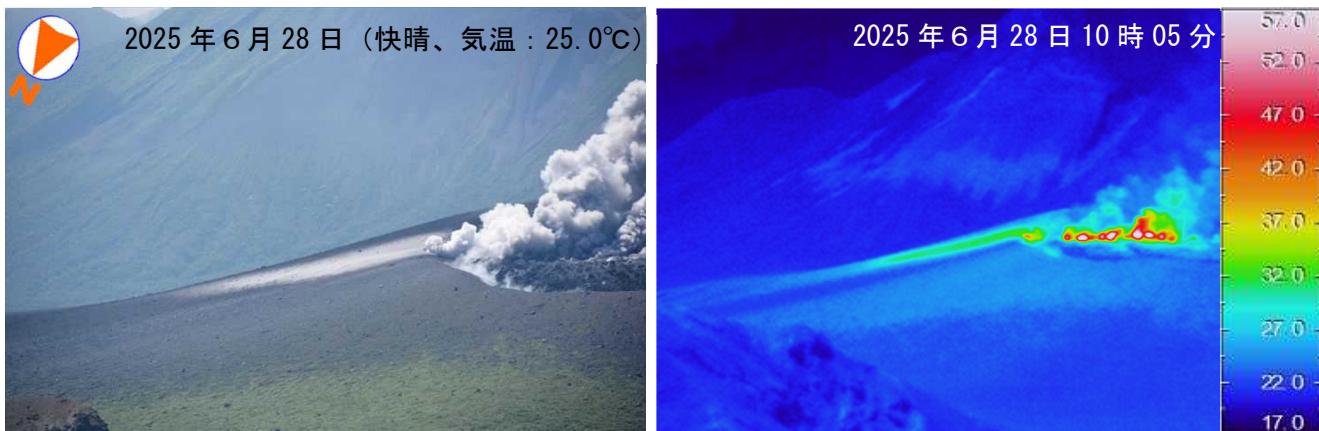


図5 霧島山（新燃岳） 新燃岳火口外北側斜面の状況（韓国岳山頂付近からの観測）

火口外の北側斜面に火山灰が堆積したような灰白色の領域が認められ、周辺より高い温度であることを確認しました。

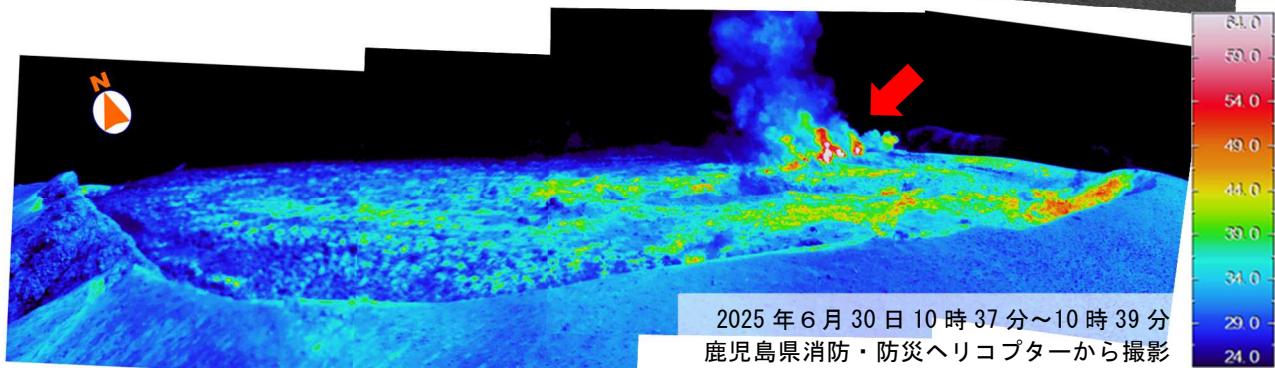


図6 霧島山（新燃岳） 火口内の状況（南側上空から観測）

30日に鹿児島県の協力により実施した観測では、火口内北東側（赤矢印）から乳白色の噴煙が上がり、北西に流れていきました。

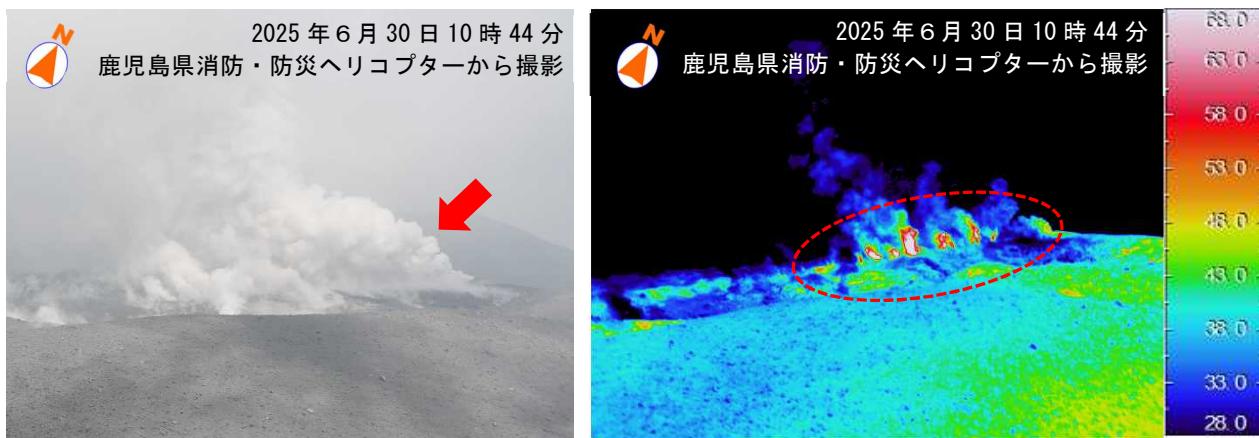


図7 霧島山（新燃岳） 火口内の状況（南東側上空から観測）

- ・30日に鹿児島県の協力により実施した観測では、火口内北東側から乳白色の噴煙が上がっていることを確認しました（赤矢印）。
- ・赤外熱映像装置による観測では、新燃岳火口内の北東側において、列状に並んだ複数の火孔から噴煙に対応した熱域を確認しました（赤破線内）。

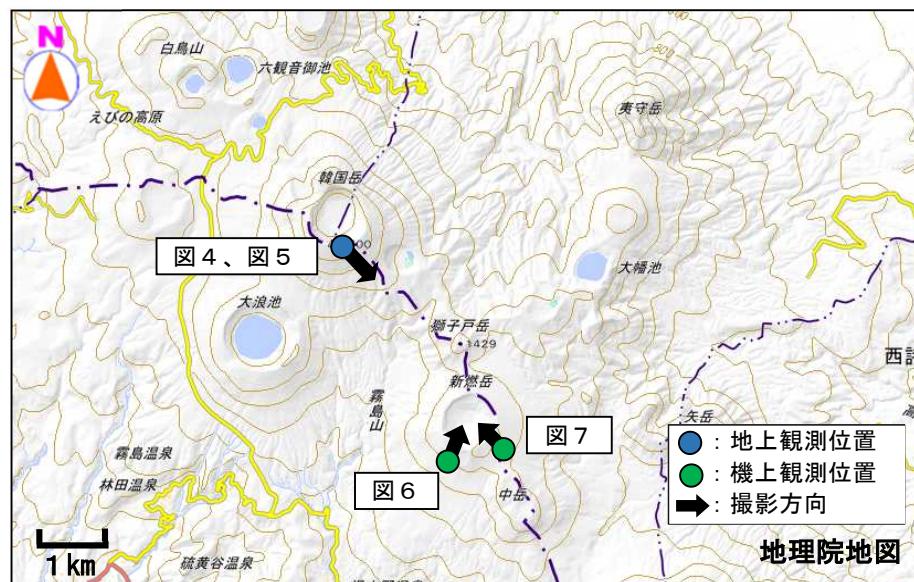


図8 霧島山（新燃岳） 図4～7及びの観測位置及び撮影方向

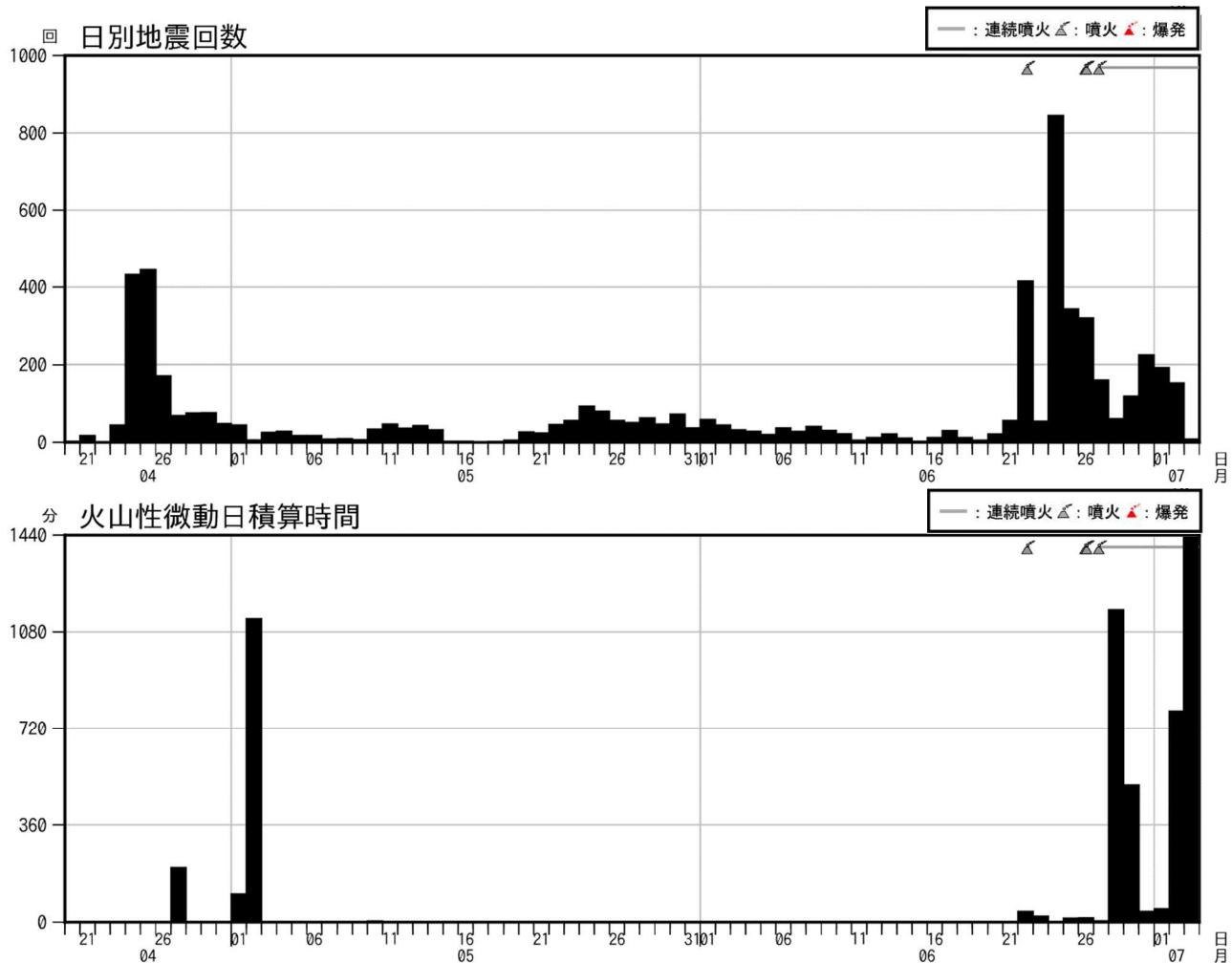


図9 霧島山（新燃岳） 火山性地震の日別回数（上段）及び火山性微動の日積算時間（下段）
(2023年4月20日～7月3日)

新燃岳では、22日から火口直下を震源とする火山性地震が急増し、非常に多い状態で経過しています。火山性微動が22日以降断続的に発生しています。

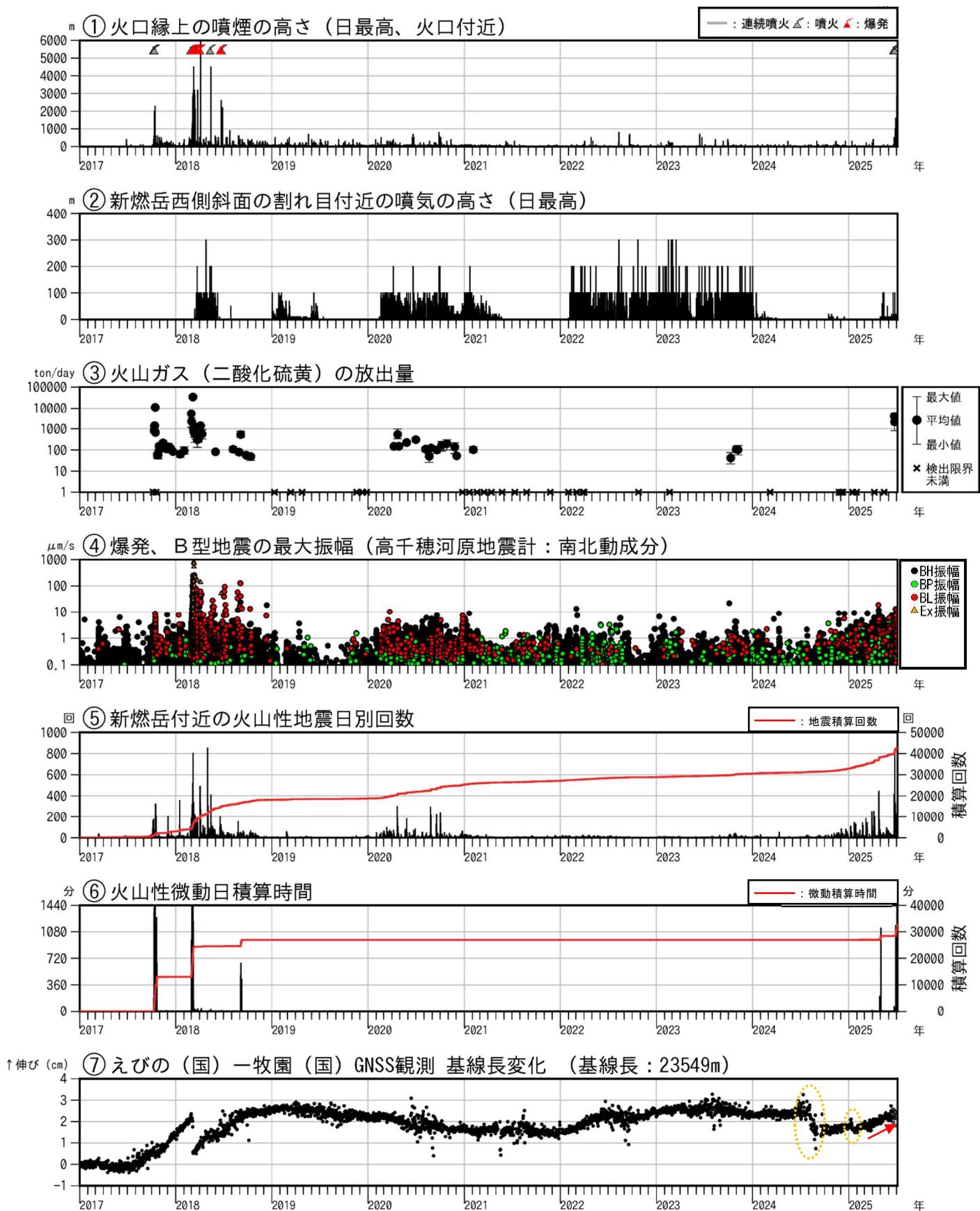


図10（前ページ）霧島山（新燃岳）火山活動経過図（2017年1月～2025年7月3日）

＜6月の状況：23日に噴火警戒レベルを2から3に引き上げました＞

- ・新燃岳火口では、6月は有色の噴煙が最高で火口縁上1,600mまで上がりました。7月2日以降、噴火に伴う噴煙量の一時的な増大が時々観測され、7月3日には有色の噴煙が最高で火口縁上5,000mまで上がりました。新燃岳西側斜面の割れ目付近では白色の噴気の高さは期間を通して100m以下で経過しました。
- ・23日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は4,000トン（前回5月15日：検出されず）を観測し、急増していることを確認しました。その後の現地調査では、1日あたりの放出量は2,100～4,000トンと多い状態で経過しました。
- ・新燃岳では、2024年10月下旬頃から火口直下を震源とする火山性地震が増減を繰り返していましたが、22日から急増し、非常に多い状態で経過しています。新燃岳付近の火山性地震の6月の合計回数は3,076回で、前月（5月：1,021回）と比較して増加しました。
- ・22日以降、火山性微動が断続的に発生しています。
- ・GNSS連続観測では、3月頃から、霧島山を挟む一部の基線で霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます（赤矢印）。

⑦の基線は図14の基線⑦に対応しています。

⑦の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2024年8月8日、2025年1月13日）による変動です。

※新燃岳南西観測点の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点及び高千穂河原観測点で計数している期間があります。

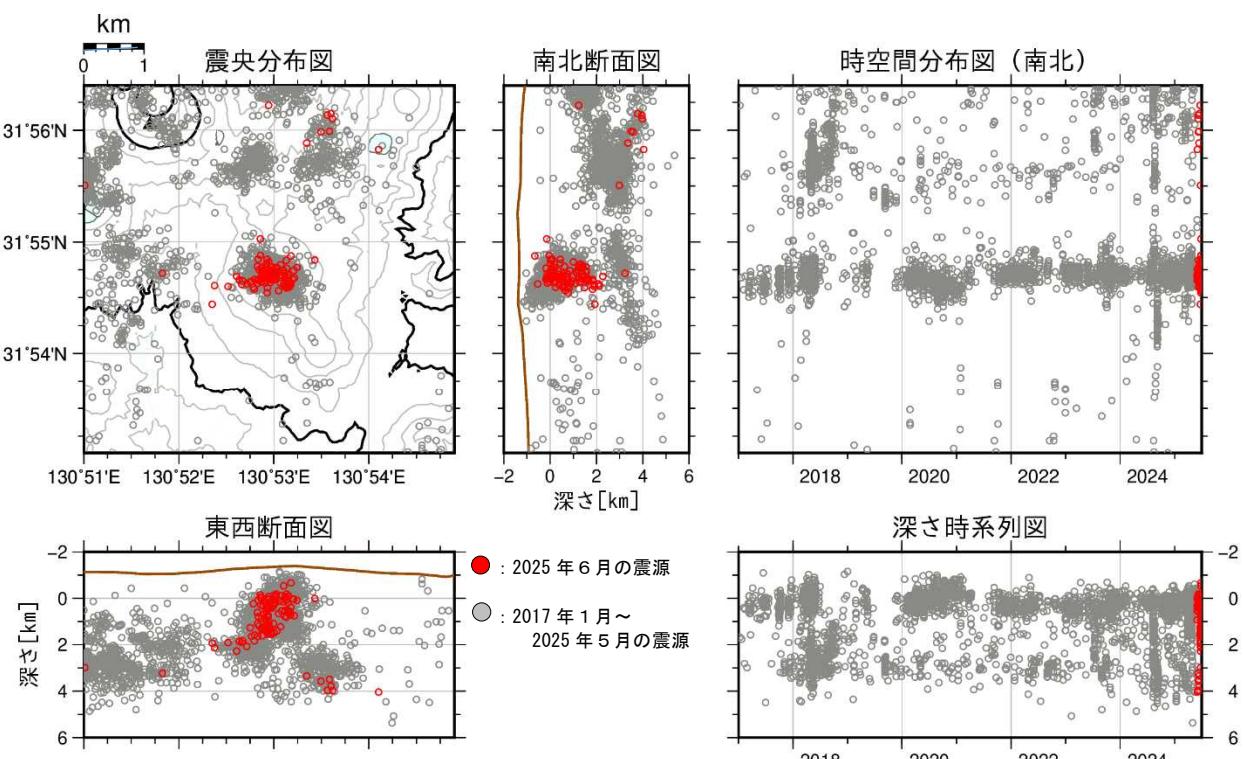


図11 霧島山（新燃岳）震源分布図（2017年1月～2025年6月）

＜6月の状況＞

震源が求まった火山性地震は、主に新燃岳火口直下の深さ0～2km付近及び新燃岳の西側約1kmの深さ2km付近、新燃岳の北東側約3kmの深さ3km付近に分布しました。

※観測点の障害により、震源が求まらなかった期間があります。

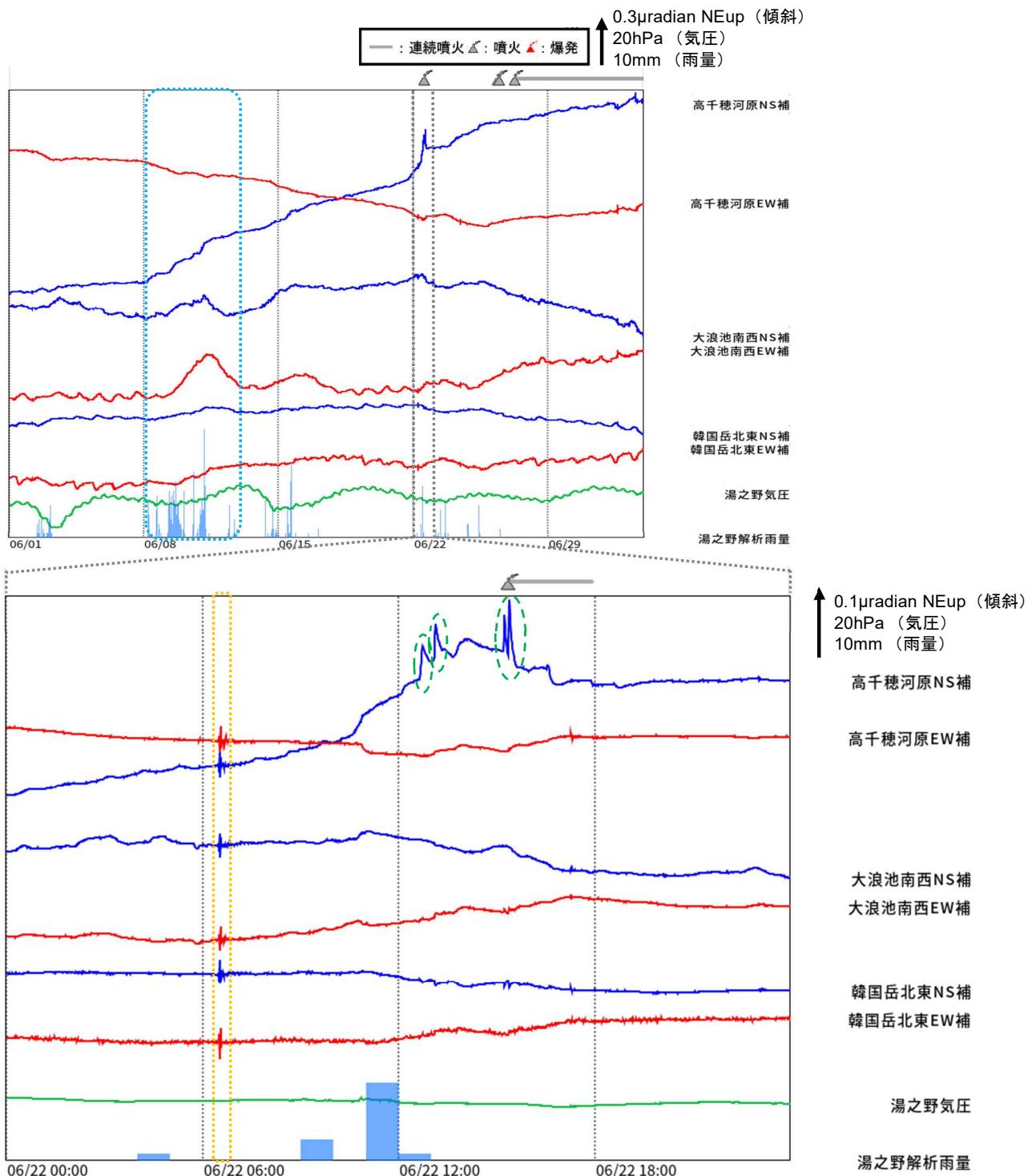


図 12 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）

(上段：6月1日～7月3日、下段：6月22日00時～6月23日00時)

新燃岳周辺の傾斜計では、22日12時頃から15時頃にかけて、火山性微動の発生に伴い、山体の膨張及び収縮を示す地殻変動が時々認められました（緑色破線内）。

橙色破線内の変化は、遠地地震による変動です。

青色破線内の変化は、降水の影響を受けている可能性があります。

各観測点の成分名に付記された「補」の文字は、そのデータが潮汐補正済みであることを示しています。

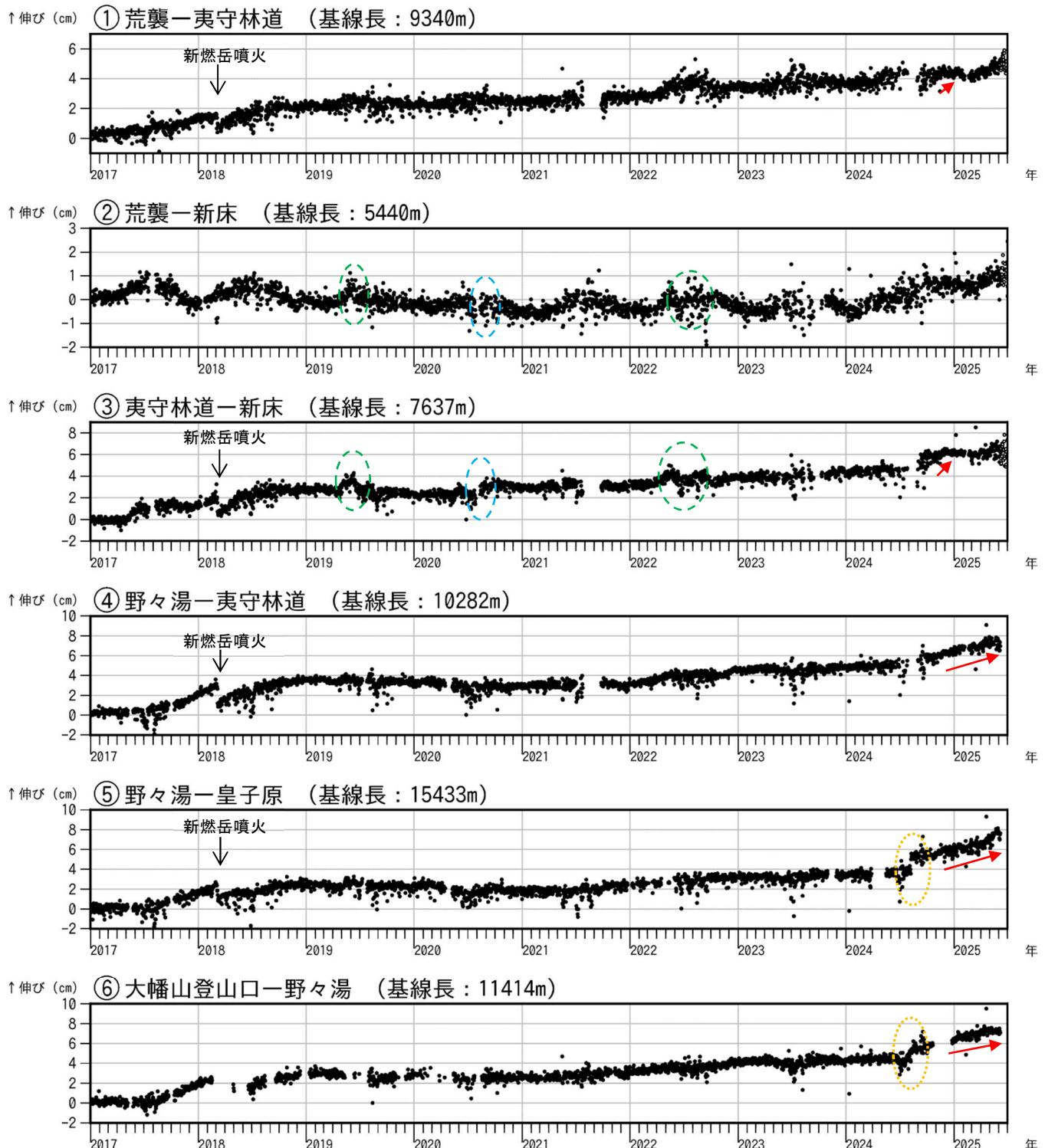


図 13 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年6月）

GNSS 連続観測では、2024年11月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます（赤矢印）。

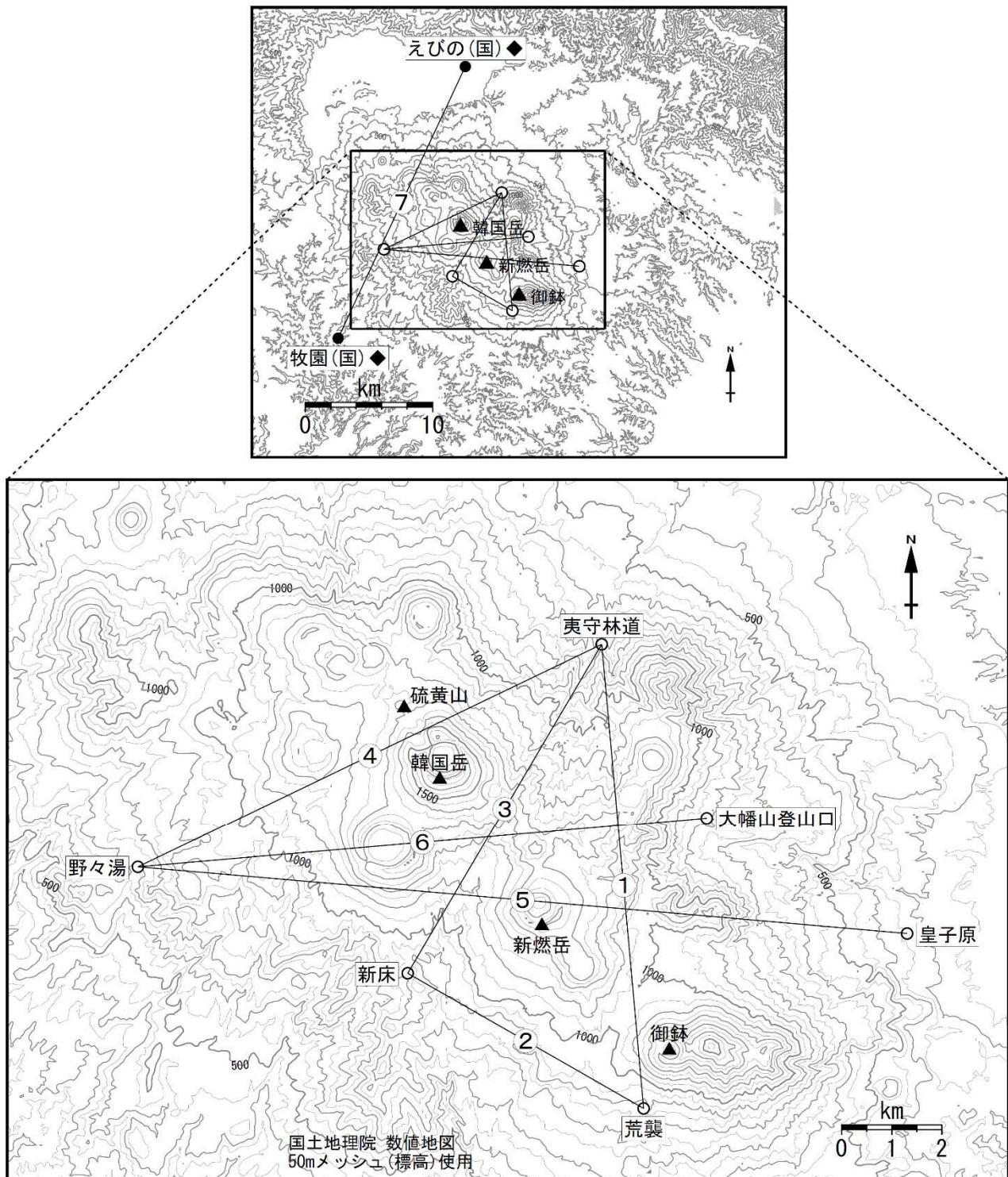
これらの基線は図14の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。

水色破線内の変化は、新床観測点のセンサー台交換による局所的な変動による影響と考えられます。

橙色破線内の変化は、2024年8月8日の日向灘の地震による変動です。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院

図 14 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院

御 鉢

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

活火山であることから、火口内でごく少量の火山灰等を噴出する規模の小さな現象が突発的に発生する可能性がありますので注意してください。

地元自治体等が行う立入規制等に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～3、図5-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

30日に鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、御鉢火口内及び火口周辺に日射の影響を上回る地熱域や噴気は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図4、図5-②～⑤）

火山性地震は観測されませんでした（4月：なし）。

火山性微動は2018年2月10日以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、御鉢を挟む基線には、特段の変化は認められません。



図1 霧島山（御鉢）　御鉢の状況（6月30日、猪子石監視カメラ）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

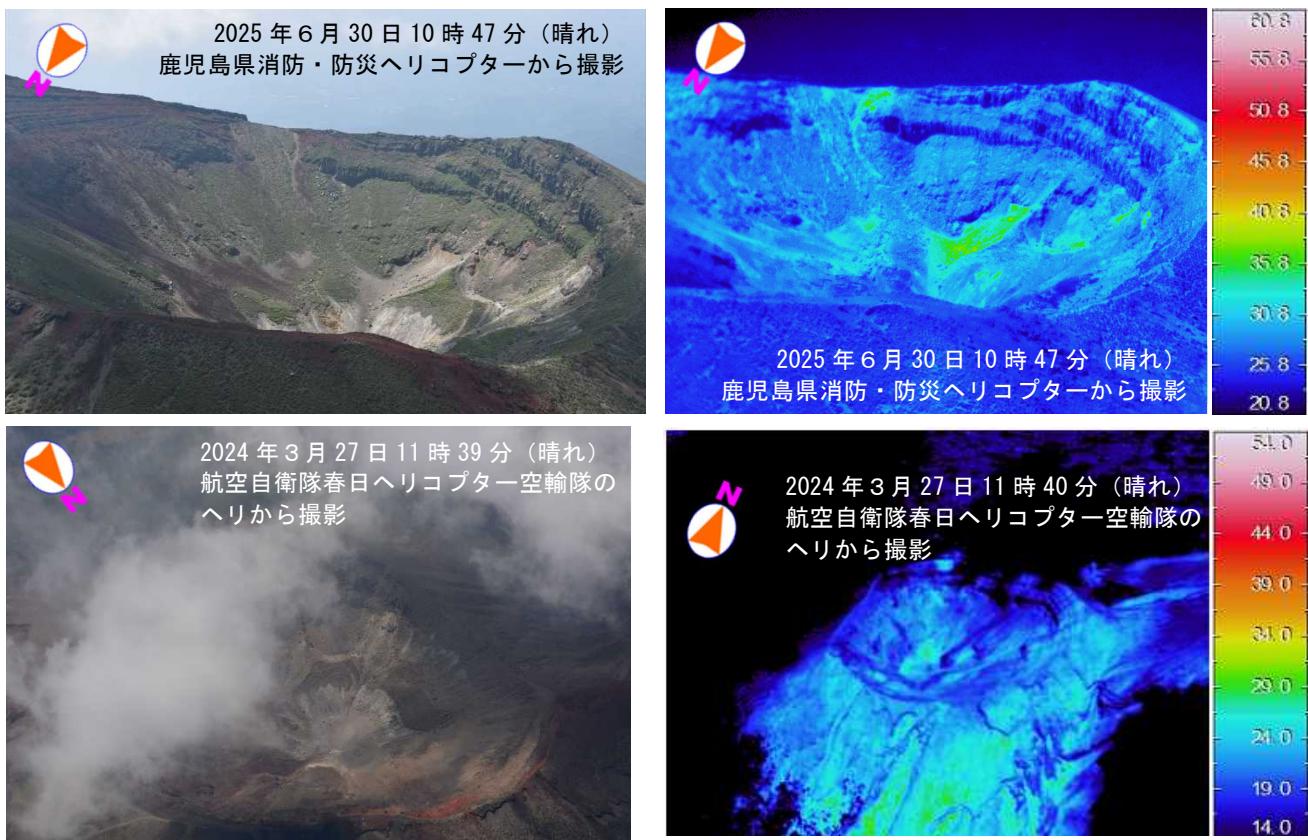


図2 霧島山（御鉢） 御鉢火口内の状況

御鉢火口内及び火口周辺に日射の影響を上回る地熱域や噴気は認められませんでした。

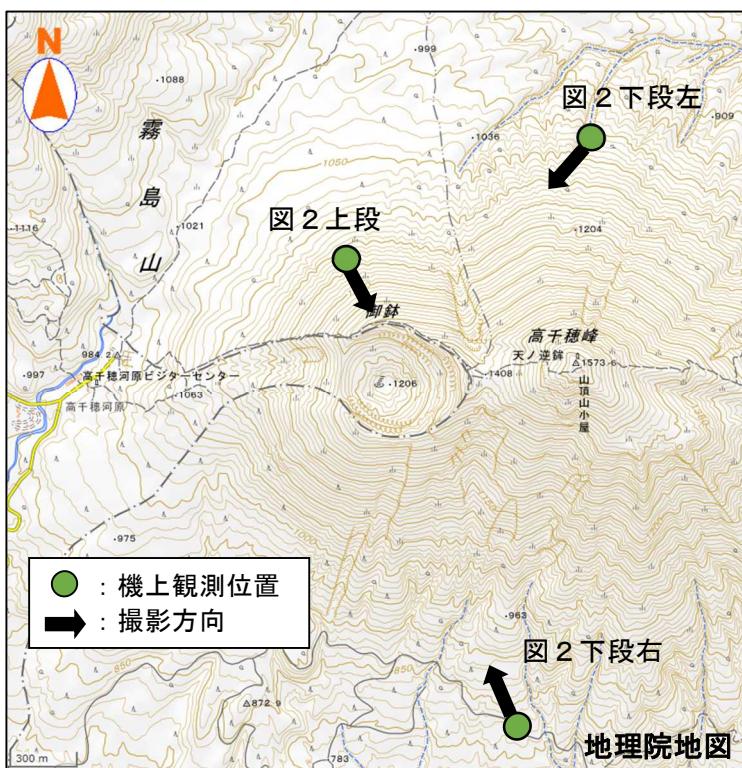


図3 霧島山（御鉢） 図2の観測位置及び撮影方向

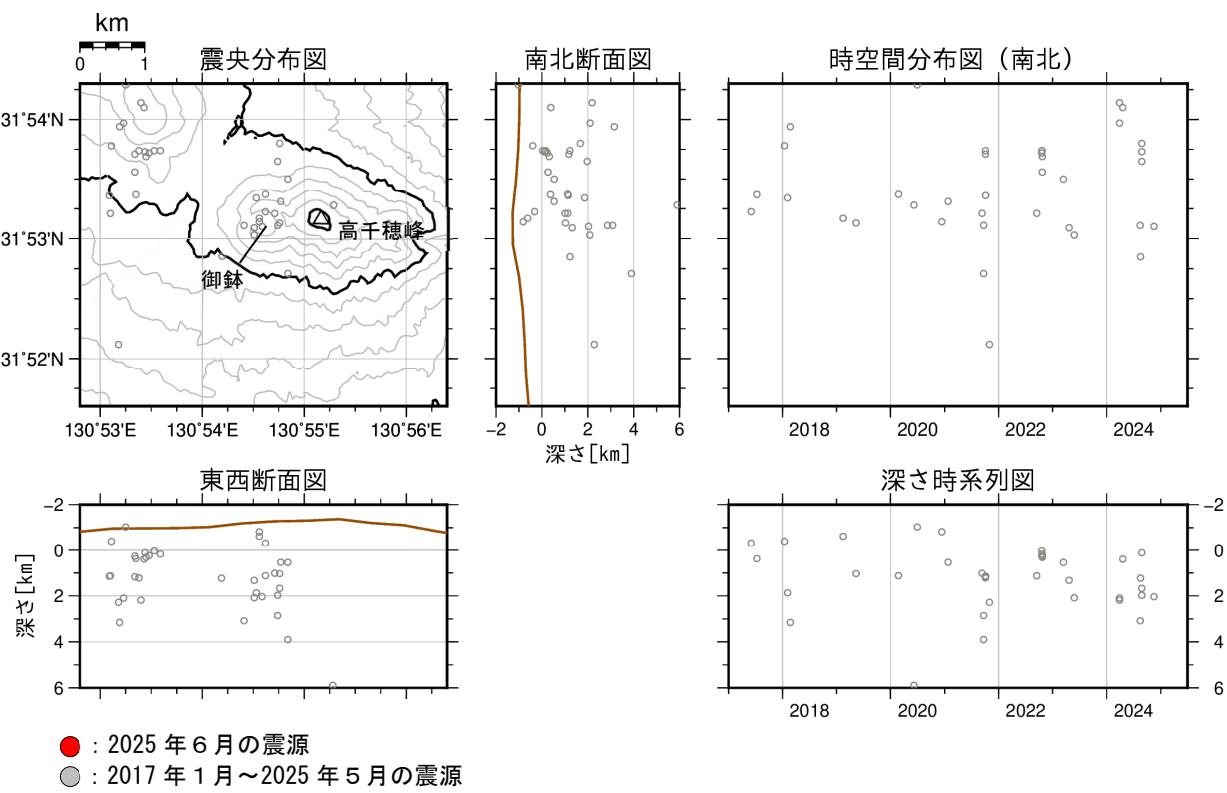


図 4 霧島山（御鉢）震源分布図（2017 年 1 月～2025 年 6 月）

<6 月の状況>

火山性地震は観測されませんでした。

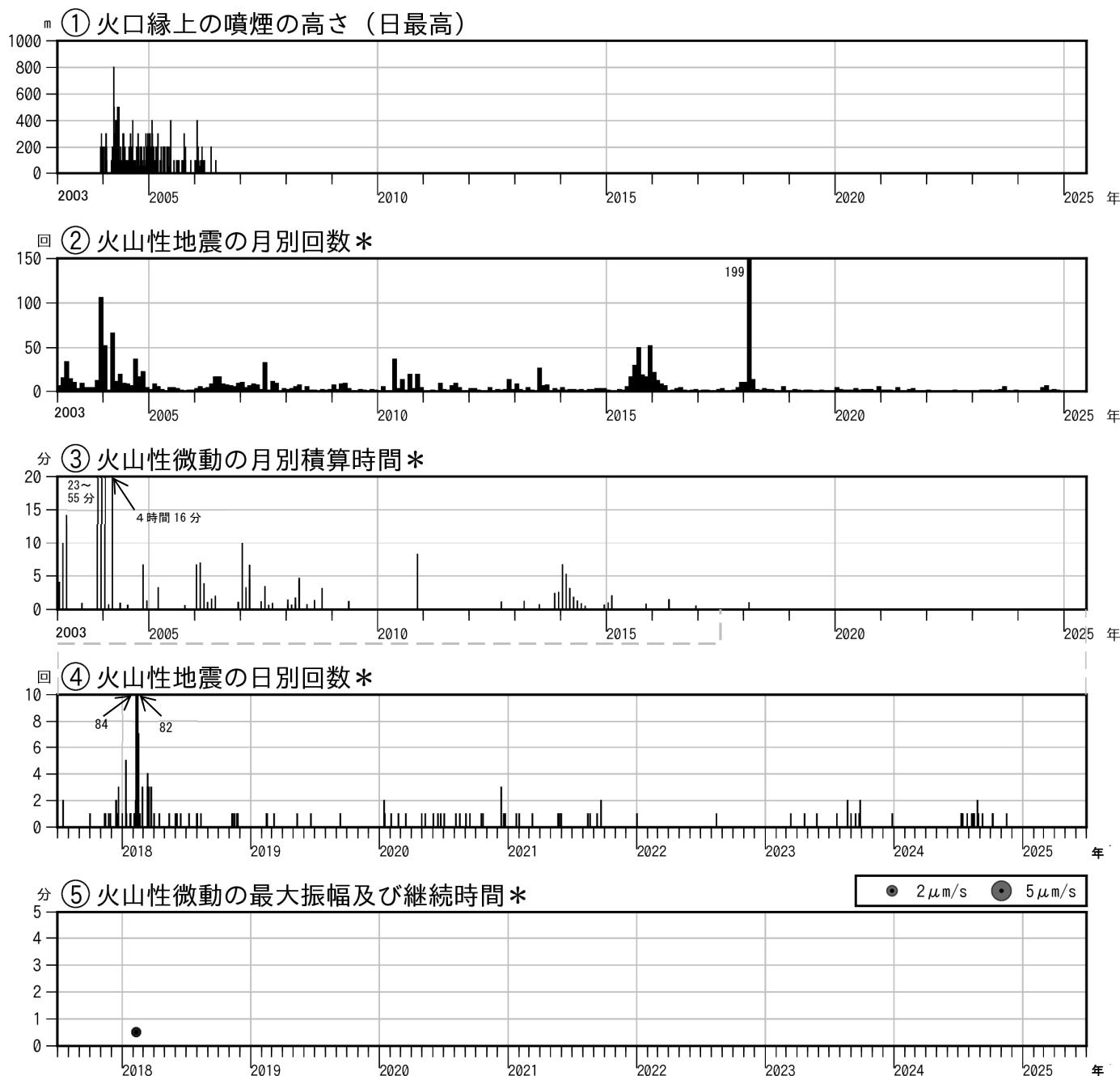


図5 霧島山（御鉢） 火山活動経過図（2003年1月～2025年6月）

<6月の状況>

- ・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
- ・火山性地震は観測されませんでした（5月：なし）。
- ・火山性微動は2018年2月10日以降、観測されていません。

* 「高千穂峰2観測点、高千穂西（震）観測点及び高千穂河原観測点」で計数

(計数基準 高千穂峰2：上下動 $2.0 \mu\text{m/s}$ 以上、高千穂西（震）：水平動東西成分または上下動 $1.3 \mu\text{m/s}$ 以上、高千穂河原：水平動南北成分または上下動 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上)

2022年8月21日から11月17日まで、及び2023年8月24日以降高千穂峰2観測点は障害のため、高千穂河原観測点で計数しています。

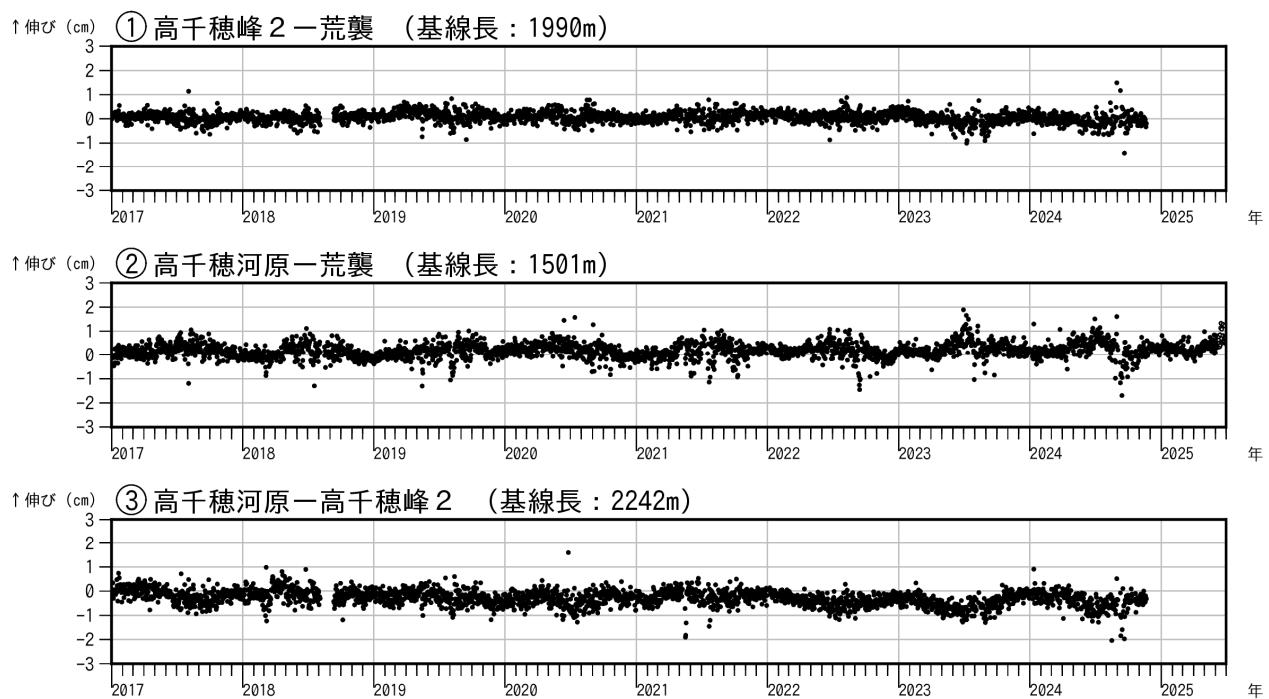


図6 霧島山（御鉢） GNSS連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年6月）

GNSS連続観測では、御鉢を挟む基線には、特段の変化は認められません。

これらの基線は図5の①～③に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

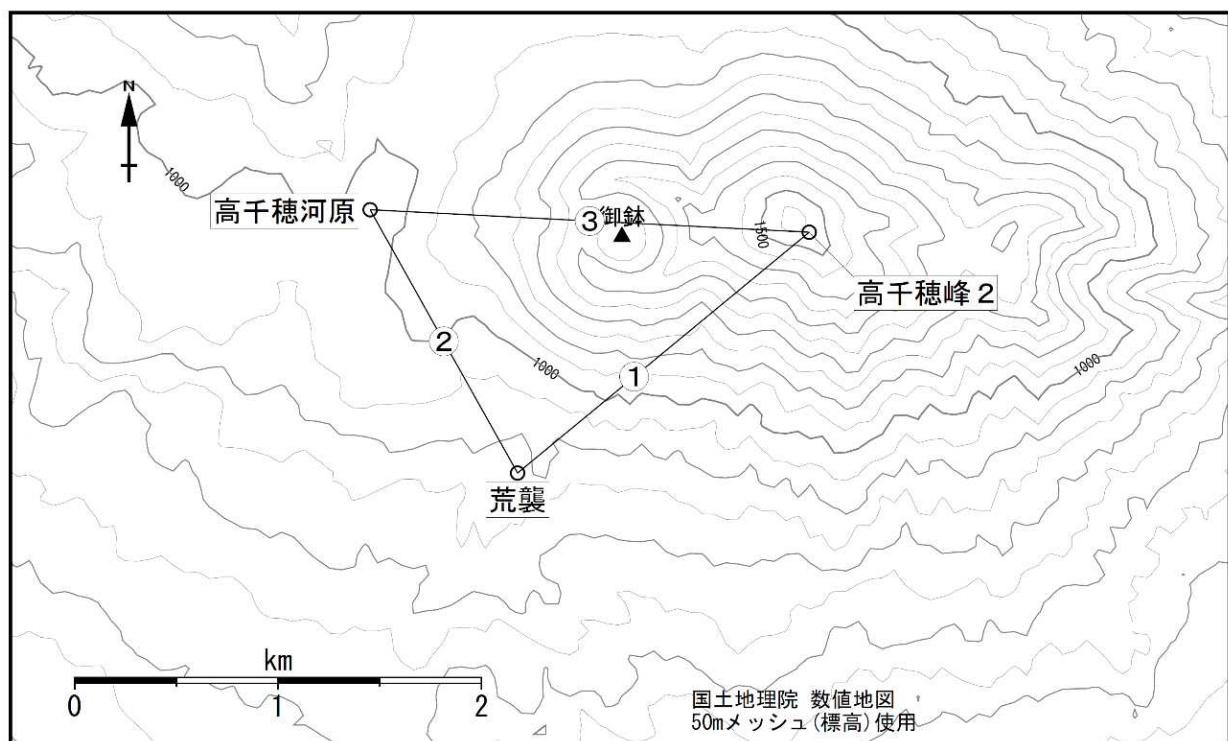
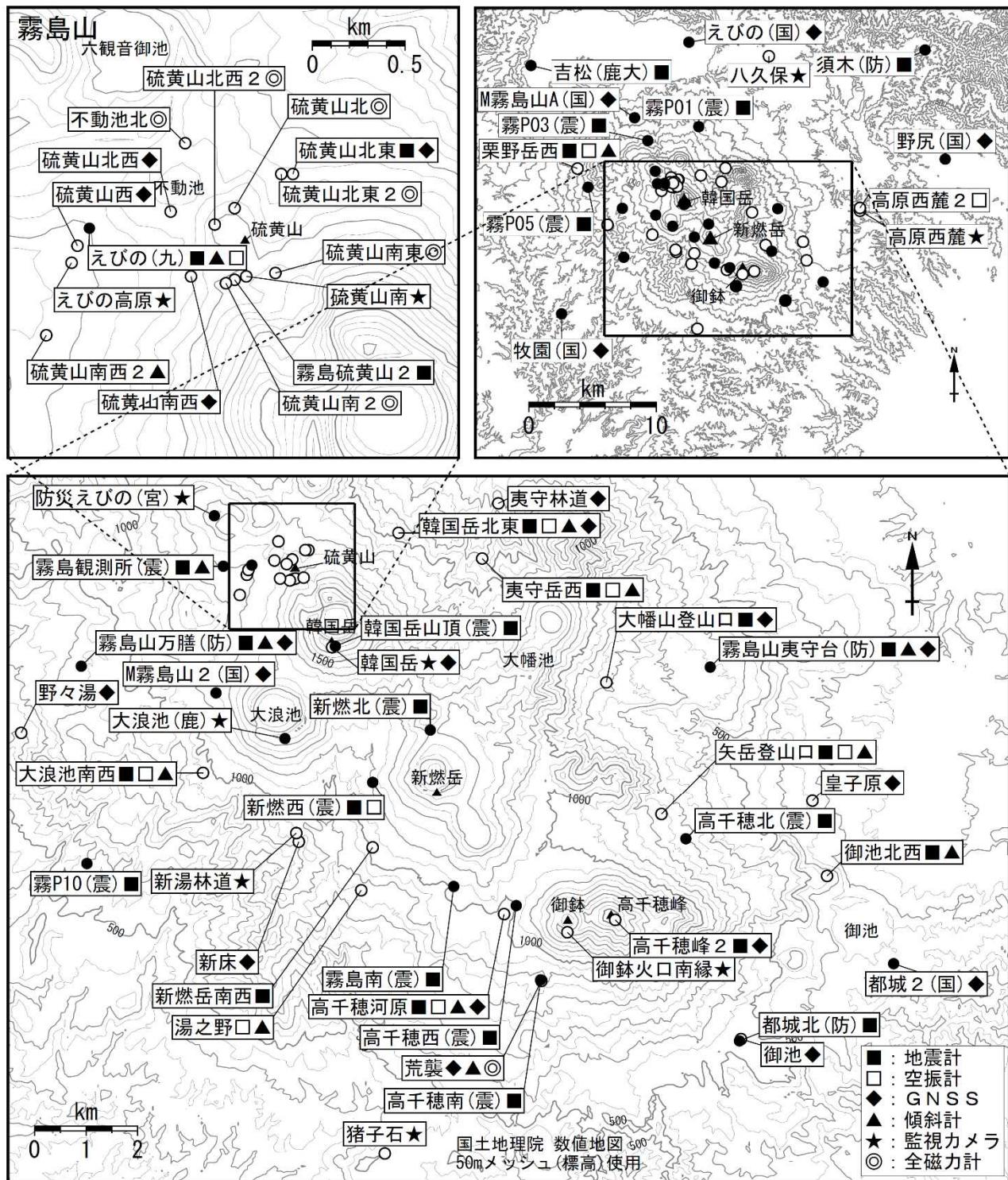


図7 霧島山（御鉢） GNSS連続観測点と基線番号



霧島山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(震) : 東京大学地震研究所、(九) : 九州大学、(鹿大) : 鹿児島大学、
 (防) : 防災科学技術研究所、(宮) : 宮崎県、(鹿) : 鹿児島県